

## 巻 頭 言



本間研一  
理事長

ほ乳類の時計遺伝子発見を契機に、世界の研究室を席卷した時間生物学の分子生物学研究が一段落を迎え、世界の研究者たちは新しい地平に向けて満を持しているような今日この頃ですが、会員の皆さんはいかがお過ごしですか。昨年来、日本の時間生物学にとって、喜ばしい事が続けてありました。その1つは、日本の3大国際賞の1つである国際生物学賞の2006年度受賞テーマに時間生物学が採択され、日本人研究者とも馴染みが深いオランダのSerge Daan博士が受賞されたことです。これは、時間生物学が生物学の重要な分野であることが日本でも正式に認められ、権威づけられたことを意味します。Daan博士は、時間生物学の泰斗であるColin PittendrighやJürgen Aschoffのもとでポストドク時代を過ごし、今ではこの分野の古典となった5編の論文(J Comp Physiol, 1976)を著すとともに、その後も彼らの共同研究者として、時間生物学における大きな2つの潮流を融合させた功績が認められて、今回の受賞に至りました。ちなみに国際生物学賞は生物学者であった昭和天皇の在位60年を記念して制定された格式の高い賞です。朗報の第2は、名古屋大学理学研究科の近藤孝男先生が平成18年度朝日賞を受賞されたことです。朝日賞は朝日新聞が主宰する権威ある賞で、これまで野依良治氏、平山郁夫氏、ドナルド・キーン氏など日本の科学や文化を築いた人々に贈られています。近藤先生は、長年植物や藍藻類の生物時計について研究されてきましたが、特に藍藻類の分子生物学的な研究で、生物発光を利用したリズム解析法を時間生物学に初めて導入し、分子振動という新しい独創的な概念を提唱したことが評価されました。近藤先生の受賞は、日本時間生物学会にとりまして大きな喜びであります。

時間生物学会の最も重要な活動である学術大会は、今年11月、高橋敏治先生(法政大学)を大会長として、日本睡眠学会(大井田隆大会長)との合同大会として東京で開催されます。日本睡眠学会との合同大会は初めての試みですが、日本時間生物学会が「生物リズム研究会」と睡眠リズム研究が主体であった「臨床時間生物学研究会」とが合流して創設された経緯を考えると、むしろ自然な成り行きと思えます。昨今、学術研究の社会や国民への成果還元が強く求められているなか、日本時間生物学会も、基礎研究の一層の充実とともに、医学などの応用科学との連携を推進して行かなければならないと感じています。その観点からも、日本睡眠学会との合同大会は意義深いと思われれます。なお、この合同大会に先立ち、第2回国際時間生物学会(WCC)が開催されることがつい最近決まりました。4年前の2003年、日本時間生物学会がホスト学会となり、札幌市で第1回国際時間生物学会が開催されたことは記憶に新しいところです。第2回大会は米国でSRBRが主催することになっていましたが、諸般の事情で日本時間生物学会が再びホスト学会としてお世話することになりました。経緯等の詳細については、本誌をご覧ください。

また、2年先のことですが、2009年に第6回アジア睡眠学会が大川匡子日本睡眠学会理事長(大川先生は日本時間生物学会の理事でもあります)の主宰で、大阪で開催されます。アジア睡眠学会は10を超えるアジア各国の睡眠学会の連合体で、世界睡眠学会連合の傘下団体です。この度、大川大会長から日本時間生物学会に対して、アジア睡眠学会との連携大会開催の可能性が打診されました。日本時間生物学会理事会で検討した結果、2009年の学術大会をアジア睡眠学会と連携して開催することが決まりました。日本時間生物学会も、今後アジアの時間生物学者と積極的に連携していきたいと考えております。大会の日時は10月上旬と聞いています。今秋の理事会までに、大会長や日程を決めて会員の皆さんにご報告したいと思います。

日本時間生物学会は会員数(約600名)の割には学会参加者や、演題発表数が多い、小なりといえども非常に活発な学会です。純粋に学術的な学会としては丁度良いサイズの会かも知れません。この活性を維持するとともに、会員の相互刺激を通じて、日本の時間生物学をさらに発展させて行きたいと思えます。会員の皆さんのご活躍を祈念致します。